

南のひと 23

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



竹富島出身の與那國光子さんは、鮮やかな色合いのオリジナルファッションに身を包み、胸をはって堂々と歩くキャリアウーマンだ。島の祭りを司る神司としての役をこなしながら、長年島のガイドをこなしてきた。與那國さんは地域話題を発信するラジオリポーターとしても活躍している。

以前、遠く離れて1人暮らしをしている私の母から、「今朝は、竹富島の人の声で目を覚ましたよ」と嬉しそうな声で電話がかかってきた。「満天の星を楽しむために電気を一斉に消すんだってね。素敵だね」と「南の島の星まつり」についての話だったことを知らされた。離れて暮らしていてもラジオ放送で母と繋がれた事が嬉しかった。

本土復帰（昭和47年）前、テープに声を録音してそれをラジオで流してもらったのがリポーターとしてのキャリアの始まりだったそうだ。昭和53年からは自動ダイヤルになり、電話でテレビ中継などの生放送のリポートができるようになった。昭和60年には、NHK 沖縄ラジオ放送番組内でリポートをしながら平成元年に九州全域で放送される番組にも携わるようになった。その後、平成9年からは、NHK 全国放送でのリポートをスタートさせ、現在も3ヶ月に一回のペースで「NHK マイあさラジオ」より地域話題を全国のリスナーへ届けている。

話す時に気をつけていることは、そこに物語が見えるように伝えることだという。ガイドという仕事柄、勉強のため全国をまわって視野を広げてきたことで、例え話ができることや、暮らしの中で植物や動物について自然と興味がわき勉強することができたのも良かったと話してくれた。「ラジオの與那國さんですよ」と旅先で声をかけられたり、「放送を聞いて竹富島にきました」と彼女を尋ねてくる人たちが沢山いるのだと嬉しそうに話してくれた。

最後に、「忙しくて大変な時も疲れたと言わない。楽しいね、と言って乗り切ってきたよ。私にとってのファッションとは、そういう風になれた自分へのご褒美なの」と言い、霧雨の中、大きなストールをふわりと巻きザクザクと砂の道を鳴らしながら與那國さんはさっそうと帰っていった。

水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。